

# 日本人による環境保全を目的とした ボランティア観光に関する研究

朝 格 吉 楽 図

広島大学大学院総合科学研究科

## Research on Japanese volunteer tourism with the aim of environmental conservation

Chao Ge Ji Le Tu

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

環境問題がクローズアップされ、地域の「持続可能な発展」が重要な課題となった。地域の観光開発においても、マスツーリズムへの批判から「持続可能な観光」論が展開され、エコツーリズムやボランティア観光など新しい観光(Alternative tourism)と呼ばれる様々な観光形態が提唱されてきた。

地域の環境問題や地域振興の解決手段としてエコツーリズムが注目されてきたが、近年地域社会に無償の「労働力」を提供し、経済的利益をもたらす、しかも参加者にも異文化交流や個人成長などの利益があるというエコツーリズムと部分的に重なる環境ボランティア観光、いわゆる新しい観光の一形態が増加している。

特に、日本をはじめとするアジアではこのような環境ボランティア観光の形態が地域社会で増加しているが、まだ学術的に評価されてこなかった。環境ボランティア観光は、新しい観光の一形態として地域社会に果たす役割は大きい。新しい観光の1つの視角として、環境ボランティア観光の実践の理解や学術的な研究が極めて重要である。

本研究は、日本人による自然保護活動を対象としたボランティア観光のプラス効果とマイナス効果をもたらす要因は何かという問題意識を背景と

し、ボランティア観光の実践における主催者、参加者、地元住民という3つの主体の相互関係が、ボランティア観光が地域社会で発展するプロセスの中でどのように変化しているのか、その変化がボランティア観光のプラス効果とマイナス効果にどのように影響するのかを明らかにすることを目的とした。

本論文は、序論(第1章)とボランティア観光の概要(第2章)、2つの事例研究からなる本論(第3章～第6章)、そして結論(第7章)という、3つの部分から構成される。

第1章では、環境ボランティア観光とエコツーリズムとの関係、今までのボランティア観光に関する議論および問題点を整理した上で、本研究の目的を提示した。また、本論文のキーワードである「ボランティア観光」の概念を説明した。さらに、研究方法、研究意義および、研究枠組みを概説するとともに、論文構成を述べた。

第2章では、ボランティア観光の世界的な広がりや日本での広がりを整理した。日本におけるボランティア活動は、1995年の阪神淡路大震災をきっかけに特定非営利活動が促進され、現在体験学習など教育分野や自然保護活動を含む環境分野など様々な場面で登場し、日常生活から離れた場

所でも行なわれるようになってきた。このような日常生活の場所と離れて行なわれる場合、欧米地域では「ボランティア観光」と名付けられ、学術的研究において、新しい観光の一形態として捉えてきたが、日本ではまだ従来のボランティア活動として扱われている。「持続可能な観光」による地域振興が需要とされる中で、ボランティア観光としての学術的研究が求められていることを論じた。

第3章と第4章で中国・内モンゴル自治区恩格貝砂漠地域での環境ボランティア観光の事例を扱った。第3章では、日本沙漠緑化実践協会が行なった植林ボランティア活動による恩格貝砂漠地域の変容を整理した。当該地域の変化を以下の3点にまとめた。1.恩格貝地域での植林面積が増え、緑化地へと変化した2.砂漠化され人間が住めなくなった地域から様々な人々の活動の場へと変化した3.観光地へと変化した。

第4章では、恩格貝砂漠地域での参加者など環境ボランティア観光の実態を明らかにした。そして、第3章と第4章の事例から恩格貝砂漠地域で行なわれている環境ボランティア観光のプラス効果とマイナス効果を整理し、関係者の相互関係と環境ボランティア観光の効果との関わりを論じた。プラス効果の要因について、主催者の理想・理念とコーディネート力により、主催者、参加者、地元住民の良好な関係が築かれたことが、自然保護や地域社会、参加者などへのプラス効果に繋がっている。しかも、ボランティア観光が発展する中で、3者の関係は変化を続け、特によそ者である主催者や参加者に対する地元住民の理解が深まってきた。マイナス効果の要因について、主催者と参加者の関係が優先されるため、植林時期など対象地での最適状況下で植林活動が実施できないことがマイナス効果の要因となった。また、恩格貝砂漠地域内の対立問題がマイナス効果に繋がった。

第5章と第6章で、鹿児島県屋久島町の永田浜地区での環境ボランティア観光の事例を取り上げた。第5章では、屋久島のエコツーリズムをめぐる自然保護と観光利用についてまとめた。屋久島では観光者が右肩上がりが増えていく中で、本来

の保護の立場からみて、ゆゆしき問題が出てきたため、「利用制限」が現実的な課題として議論されるようになった。屋久島において、いかなるエコツーリズムを実践すべきか、という理想論ではなく、現出している問題に対処するという現実問題が、議論の出発点となっている。そこで、地区によって関係者間の議論への関わり方は異なるけれども、基本的に「保護の論理」を中心に据え、エコツーリズムに就業の場、ないし補助的な収入確保の場を見いだした住民が、保護行政と利害調整をしている。またそれと並行して、新住民(U・Iターン者)と旧住民が住民間で利害調整しているというのが、屋久島での協議の実態といえる。そして、この協議を通じて利用ルールがつくられており、完全なトップダウンのルールというわけではない。また、ここで議論に参加する住民というのは、永田浜を除けばガイドやタクシー運転手、ホテル・民宿業者などが中心になっている。

第6章では、屋久島うみがめ館での参加者など環境ボランティア観光の実態を明らかにした。そして、第5章と第6章の事例から屋久島永田浜地区で行なわれている環境ボランティア観光のプラス効果とマイナス効果を整理し、関係者の相互関係と環境ボランティア観光の効果との関わりを論じた。プラス効果の要因について、主催者、参加者、地元住民という3者の自然保護活動に対する意識や考え方が一致していることがウミガメ保護効果に繋がった。その中で、主催者と参加者の協力関係が環境ボランティア観光のプラス効果の大きな要因となった。しかも、3者の関係が変化を続け、特に主催者と地元住民の関係は、協力的関係から対立的関係へと変わった。マイナス効果について、主催者は保護活動を最優先し、特に地元住民の間では保護の論理と地域社会の論理が相容れないところが対立的関係となりマイナス効果の大きな要因となった。また、主催者と参加者との間で「自由時間」や「観光的楽しみ」をめぐる意識・認識のギャップがマイナス効果の原因に繋がった。

結論の第7章では、環境ボランティア観光のプラス効果とマイナス効果を整理し、関係者の相互関係との関わりをまとめた。第1に、環境保全への効果について、プラス効果をもたらす要因の一

つは、主催者が参加者を集めて環境保全活動に取り組むという関係にある。しかし、主催者と参加者の関係が優先されることが、環境保全上、マイナスになることもある。さらに、この3者関係だけではなく、他の主体との関係や、3者内部のさらに細かい利害関係がマイナス効果の要因になることもある。第2に、地元地域へ効果については、プラス効果をもたらす要因として、環境ボランティア観光では、地域の環境資源を保全することが、地域の観光資源を保全し、或いは観光資源を創出することになり、直接的、間接的に地元地域の経済的利益に貢献する。また、参加者自身の観光的行動も地元地域の経済的効果に寄与している。一方で、主催者と参加者の関係において、元々参加者の条件が厳しく、保護活動中に観光行動を許さない場合は、地域経済への効果を生まない。また、主催者と地元住民の間で、保護の論理と地域社会の論理に相容れない部分がある場合も、地元地域への経済的なプラス効果をもたらさない。第3に、参加者への効果については、プラス効果をもたらす要因としては、参加者は主催者が行なう保護ボランティア観光に参加することによって様々な体験を経験し、彼らの個人成長に繋がっている。しかし、参加者の条件が厳しく、保護活動中に観光活動を許さない場合は、参加者のレジャーのマイナス面に繋がっている。

そして、環境ボランティア観光におけるよそ者と地元、保護と経済利益の関係をめぐる問題を

述べた。第1に、主催者、参加者、地元住民という3者の関係をみていく中で、それぞれの生活場所・生活空間の違いが、ボランティア観光のプラス効果とマイナス効果を左右する一つのポイントになっている。これは、観光という行為そのものが持つゲストとホスト、或いは内部と外部という関係が反映されたものともいえる。ボランティア観光は他の観光行動と違い、訪問先地域の課題の解決に多少とも貢献したいという動機をもつことに特徴があるが、主催者や参加者がよそ者と位置付けられ、ある一線より内にはその地域に関われないということは、環境保全や地域振興におけるボランティア観光の一つの限界ともいえる。第2に、環境ボランティア観光における、自然保護と観光のギャップを注目すべき点としてあげることができる。一言で、自然の保護とその活用、自然を守ることで地域の持続的な発達をめざすといっても、保護の立場からみた保護と利用の在り方と、利用の立場からみた保護と利用の在り方では、その思い描くことは大きく異なる。両者が双方に納得できる方策を見出すことができる場合もあれば、対立して互いに足を引っ張りあうことになってしまうおそれもある。ボランティア観光者は第3者として安寧な立場が保証されるものではなく、保護と利用をめぐる立場性と無縁ではいられないのである。これは、観光ボランティア活動のみならず、エコツーリズムでも乗り越えるべき壁といえる。